

平成 20 年 6 月 12 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 20 年 第 6 回講話

今日は足元が悪い所、よくお出かけ下さいました。有難うございました。今日は普段と違う感じでJRに乗りました。秋葉原で何となく降りたくなりました。先日の連続無差別殺傷事件は、世の中の乱れを象徴するような事件だと感じました。3名の方が車に轢かれ、4名の方が刺されました。刺される瞬間に後ろに下がっていくのではなく、ちょっと身体をよじる。これだけでも覚えて戴くとよろしい。身体を捻ってかわす動きが自然と身に付いていれば、刺されても致命傷にはなりません。知っていると知らないとでは、生死を分けますから、できれば知識と身体とが一緒になって下されば文句ありません。後で時間をとって、自分が刺された時どう対処するか、身体で味わって戴く時間をとりたいと思います。

では恒例の質問を致します。胸に手を当ててお考え下さい。

「昨日一日、嘘をつかなかった方は手を挙げて下さい」

(・・・沢山手が挙がる)

「一週間、嘘をつかなかった方は手を挙げて下さい」

・・・急に減りましたね。

「1ヶ月間、嘘をつかなかった方はどうですか」

・・・一人もいません。

私は夜寝る時に、

「今日は嘘をつかなかったかな？」

「今日は良い一日だったかな？」

「今日は“有難う”と言ったかな？」

「今日は運動をしたかな？」そして運動をしていなければ、肺活量の訓練をします。

最後に「明日は良い日かな？・・・きっと良い日だな」

・・・こう思って寝る癖をつけています。自分自身で生活習慣をつけようと思って努力しているので、自然と身に付いてきたものです。先日の合同フォーラムでお話した洪澤栄

一さんも夜寝る時に、「今日一日誰にお会いしたか」、「どういう約束をしたか」を必ず思い出して、その結果満足して寝るという繰り返しをしたと云います。出来るだけ眠りに付く瞬間は、良い事・楽しい事を思い出しましょう。そうすると翌朝、凄く爽やかな良い目覚めになります。

自分が爽やかになると、周りにもその爽やかさが広がってきます。その爽やかさが伝わらない組織は、組織が濁っているのです。人間はもともと爽やかでありたいとか気持ちよくありたい、皆に良かれと思って動くのが普通なのに、そうでなくなって来ています。何故でしょうか。

先ほど司会者が言われた世の中の乱れ、秋葉原の事件もOLバラバラ殺人事件もそうですが、どうしてそういうものが増えているのだらうと考えると、非常に単純明快です。教育が悪いからです。教育すべき時に教育されていない人達が親御さんになっている。教育すべき時に教育していない。尚且つ、違う教育をしてしまった。その結果として、世の中の乱れがここまで酷くなったのだらうと思います。

ですから今現在必要なものは、年配者に対する教育、小さなお子さんがいる親御さんに対する教育、そして実際に小さい子への教育だと思います。一番実効性のある教育は、公共の交通機関に乗る時の作法ではないでしょうか。例えば電車の中でお化粧をする人を見かけますが、お化粧は人目につかない所ですべきです。電車の中でお化粧をすることが許されているのは売春婦だと、昔聞きました。外国の方が日本へ初めて来た時に、なんと日本は売春婦が多いのだらうと思うのだそうです。国のマナーも違いますが、電車の中で靴を脱ぐのも、誘っていると捉える外国の方にとって常識とも言われています。

日本人が日本人として持っている常識と、外国の方が持っている常識とがぶつかり合っているのです。そこらへんをよく区分けをしながら見なければいけないと思いますが、あまりにも昔から伝わっている常識が踏みにじられて消滅してしまった。そのあたりをもう一度見直す必要があると思います。例えば、公共の交通機関に乗ったらこうなさいというものを、民間の団体でもよいし政府でもよいから大きく提案し、実行していくことが必要なのではないかと思います。一番良いのは、それを行政の力でやることだと思います。

小さいお子さんを持っている親御さんに対する教育や現実の子供さん達の教育は、今の教育のあり方を根本から見直してやっていかなければならないと思います。

まず手始めに私どもは、どういう事を毎日すれば良いのでしょうか。周りに自然と感化を及ぼすような事を、少しずつやれば良いと思います。私ができる事は、まず<嘘をつかない>、それを生活習慣にしましょう。そうすると気持ちが良いし爽やかですね。それを隣の人に話をする。その繰り返しをしていって、<嘘をつかない>というのは日本の良い

伝統ではないか。そのように広げて戴ければ良いと存じます。

今申し上げた事は、基本哲学「知足」、私の好きな言葉「嘘をつかない」「利によりて行なえば、怨み多し」の解説になります。

今回、『素読論語』を作ったのですが、「論語学」という学問を言い始めようかと思いました。儒学なのですが、儒学・儒教と言いますと、どうも広がりすぎているように感じます。私は陽明学を学んでいますが、陽明学と論語はやはり違います。これからは文章に書いたりお話をしたりする時に「論語学」という言い方をしていきたいと思っています。

では、心に残る言葉に参ります。本日は「後世畏るべし」です。

子曰く、後世畏るべし。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや。

四十五にして聞こゆること無きは、斯れ亦畏るるに足らざるのみ。

子罕第九（通 227）

後継者を作るのは難しいですね。今回私は、自分で選んだシムックスの後継者をチェンジしました。その分、今シムックスの会長業にも力を注がなくなりました。会長業務をやりますと、大体一日 100 人くらいの報告をチェックしなければいけないし、出て歩きますから人様との会話も増えます。ですから、かなり命を削る作業に入っています。

今の世の中を見ていると、命を削る動きがあまりにも少ない。死に物狂い・命懸けという仕事を、誰がしているのかと思います。政治屋の人達が、問責決議案という茶番劇をしています、無駄な事をしていますね。もっと本気で真剣になってやればいいと思います。

三洋電機の創業者の井植歳男さんの口癖は、「事業はわが人生。仕事は命懸けで、死に物狂いでやるのだ」と言っておられたといます。周りを見渡してみても、仕事に命懸けで取り組んでいる人がどれくらいいるのかと感じます。ただ私は今、現実に自分自身で仕事も人生に対しても命懸けで対応しています。命を削る作業をしていると実感しています。

そういう実感があると、人と会った時にはまさに一期一会です。シムックスで一週間に一度、若手を相手に道場で早朝稽古をしますが、来週もあるからという理由で遅れてくる社員がいました。私が持っている DNA を伝えるのは残されたほんの僅かな期間しかないのだから、私は必死になり死に物狂いで道場に出てきているのです。その若手社員に、「こういうものは一期一会で、この瞬間瞬間を大事にしているのだよ。同時に教えるもの

は写瓶なのだ。そういうつもりでやっているのだよ。」と、きつく伝えました。そして今意識して使っている、「写瓶」とか「一期一会」といった言葉を調べて報告書を出させています。OJT教育です。普通の仕事のほかに、そのOJTの報告書がシムックスの会社で非常に増えています。それをやる事によって覚えさせるのは、辞書を引く癖を付けさせたいからです。ネットで調べて表面的なことだけを報告しないで、なぜ私がそれを調べろと言ったのか自分で考えて、カチッと来たものを答えるようにコメントしています。

ですから私がここで話しさせて戴くことも、表面的な理解だけで終る時と、心の中に何か自分の体験があって「なるほどそうだな。私も同じ事を感じたのだ。私もそうしたい・・・」と感ずることがあると思います。「今日はいい話を聞いた。よかったな・・・」だけで終ったのでは悲しくなります。自分が何かをしたいと思うものに結びつかないと、効果が薄かったこととなります。

教育の原点は<憤>という一文字に集約されていると思います。公の憤があれば、たいしたものです。「ようし、俺も負けてなるか」というエネルギーを生み出させる元が<憤>です。

「後世畏るべし」はその<憤>を教える側が持ち、教わる側が持ち、それがぴったり一致した時に教育の効果が出ると思います。

先ほど申し上げた、松下幸之助さんと井植歳男さんの関係を申します。

井植歳男さんは松下幸之助さんの奥さんの弟です。松下幸之助さんが独立した時に人手が要するという事で、井植さんと呼んで仕事を手伝わせたのが、形影相伴うと言われるようになったスタートです。松下さんから見ると井植さんは、「後世畏るべし」という弟だったと私は感じます。

論語の中にある「後世畏るべし」は、20歳くらい年齢差があると「後世畏るべし」がピタッとはまるようですが、年齢が若い人に対して、<この若者は仕込んだら素晴らしい。自分を簡単に越していく大物になるだろう>という気持ちを持たせるようなお弟子さん、後輩がいたら良いですね。自分の身の回りを見て、自分を乗り越えて自分より優れて素晴らしい人物になっていく者がいるかどうか。身内・組織(会社の中)・地域・国家の観点で「後世畏るべし」を探すが良いと思います。見つけられたら、その人に対する教育の仕方が変わってきます。

子曰く、後世こうせい畏るおそべし。焉いづくんぞ来者らいしやの今いまに如しかざるを知らんや。

四し十じゅうにして聞きこゆること無なきは、斯これ亦また畏るおそるに足たらざるのみ。

この若者が今の私に及ばないなどと分かるものではない。私をぐんぐん引き離して素晴

らしい人物になっていくかもしれない。その片鱗が見たいものだ……。この人が四十五十になった時に名前が聞こえていなければ、畏れるに足りない。

四十になったら自分の顔に責任を持てと言います。嫌なことばかり体験していると顔に皺が寄って、見るから嫌な顔になります。良いことの連続の人生であったり、自分で嫌なことがあってもプラスに変えていくような心がけをしていると、良い表情になります。四十五十になって、自然と回りの人に「あの人はいいね」と伝わってくることです。知って貰いたいと色々とメッセージを出す人は、意外と聞こえてこない。メッセージを出さなくても聞こえるものは聞こえてきます。

今回の秋葉原の無差別連続殺傷事件を起こした人は、携帯サイトに何度も書き込みをしています。多分心の中では「止めてくれ！」とメッセージを出していると思います。そして「誰も止めてくれなかった」と怨みつらみを話しをしていると報道されています。おかしいですね。これは情報があまりにも多すぎて、情報が氾濫しすぎて、それを整理する力がなくなっている。これは国としてそういう力がなくなっているし、組織体として力が無くなっているし、家庭として子供のメッセージを受け取る力が無くなっていると思います。情報の出し方・受け止め方については、自分自身反省しなければいけないと感じます。

情報を出す時、又は伝える時は、自分の意思を本音で伝えるのが一番です。但し、相手の許容量に合わせて自分の本音を出すべきです。相手の状況に応じて、自分の本音を上手に伝える。相手が受け入れてくれるような表現方法を研究しなければいけないと感じます。又、情報を受け止める時には、素直に受け入れるという姿勢がいいなと感じています。

「後世畏るべし」を見つける時には、本音で話をして、本音で人さまとぶつかり合うことです。それで<良いな>と思ったら、素直に認めることが必要だと思います。

松下幸之助さんが井植歳男さんを見つけた経緯を申します。もともと奥さんの弟ですから「見つける」という言い方は当たらないかもしれませんが、松下幸之助さんは最初に「この児は、自分と同じ体験をしているぞ」と思ったようです。二人とも生きるか死ぬかの体験をしていました。

井植さんは14歳で松下幸之助さんの所へ手伝いに入ったのですが、その前の歳に生きるか死ぬかの体験をしていました。父親が急死した後叔父の船に乗っていましたが、その船が岩壁に着く際に倉庫の大爆発に巻き込まれて炎上し、咄嗟に海に飛び込んで九死に一生を得たのです。松下幸之助さんも溺れる寸前の体験をしていましたから、松下幸之助さんの心がふっと広がったのでしょうか。

人間が人間とお付き合いをする時に、何かのきっかけがあって、「この人はこういう人

だったのか・・・」という新発見が時々あると思います。そういう新発見が積み重なっていく中で、はっと「後世畏るべし」という人間を身の回りにつけられたら素晴らしい事だと思います。

松下幸之助さんと井植歳男さんについては、色々な本が出ています。本日ご紹介する『虹を創る男』も、小説ですから非常に面白く読めました。

井植歳男さんが亡くなった時には、1万3000人の会葬者があったと書いてあります。三洋電機社員の方は3万人の頃です。井植さんの良いと思うところは、最初に申しました「命懸け・死に物狂いの仕事」という台詞なのですが、それと同時にスタートの時に非常に私は気に入っています。

2万人の社員を抱える松下電器の専務を辞めて、たった20名の同志を集めてのスタートでした。吹きさらしのおんぼろ工場で、みかん箱の上に乗って吹きさらしの寒さ中に延々と「今の我々には何も無い。何も無いけれども、三洋電機は世界を股にかけてこれからどんどん大きくなっていく。世界一の発電板のメーカーになるぞ」と演説をぶったそうです。その夢に突き動かされて周りが賛同して、“よし、一緒にやっぺいこう”となって、寒い吹きさらしの中で聞いていたのに、どんどん熱気が溢れてきたそうです。やはり何でも最初のスタートが肝心で、スタートの時にどういう夢を持つか、その夢の持ち方によって日常の動きが変わってくると思います。そういう動きを見るからこそ、松下幸之助さんが「後世畏るべし」と思ったのではないかと感じます。

井植歳男さんが群馬県に三洋電機の群馬工場を作ろうとした時、地元の陳情があって、東京三洋電機という別会社にして作ったという経緯があります。これは聞くと、社運を賭けるような進出だったそうです。当時は100億円の予算を組んで、30万坪強の土地を買って出た。これに失敗したら、会社は潰れるような賭けだったそうです。これは、いつも「命懸け・死に物狂いの仕事」を実践して来ているのだと感じました。私が会社を創りたての頃に、東京三洋電機さんの仕事を戴いてスタートしたようなものですから、余計に感じます。

人間の夢で周りが動く。自分も動く。夢を持っていない人生ならば、生きていて楽しくないと思います。夢のある人生の方が良いですね。夜寝る時に、夢が少しずつ達成できたなと思ったら、こんなに嬉しい事はない。ご自分に夢あるやなしや、と問いかけて戴くのがよいと思います。

残り時間が少しありますので、今私はシムックスという会社で各拠点を回っておりまして、そこで感じた事を二つご紹介します。

先日ある銀行の方とお話をした時に、こう言っておられました。

「今、運送業と建設関係は、銀行としてはお金を貸したくありません。この2つの業界の7割ぐらいは貸したくない会社です。3割の会社は特殊技術を持っているから、お金をお貸しできます。」

シムックスの営業所を回ってみて、資格を持っていないガードマンは仕事がないから辞めています。資格のあるなしで仕事があったりなかったりする時代に入ったと感じます。その結果として、資格を持っていない人は辞めざるを得なくなって、辞めています。今までは資格を持っていても、お客様が鼻も引っ掛けなかったわけです。資格を持っている人には仕事を頼みたいということであれば、資格を持っている集団に切り替えれば、どんどんお客様が仕事を頼んでくれる。つまりシムックスにとっては、生き残る3割の方に入っていく、非常に良いポジションに来ていると思います。私は会社の中で、「資格を持っている人は忙しくてたまらない。資格のない人間は辞めていく。これほどはっきりした判断基準はないではないか」と言いました。翻って、自分自身にどれだけ特殊技術があるか、人さまの役に立つ技術を自分がどれだけ持っているか、これを自問自答すべきだと拠点を回って感じました。

二つ目は、目先を考える営業所が多いと感じました。半年か1年先を考えないで、今月から来月のことばかりを見ている。一つの営業所では仕事がなく立ち行かなくなっているけれども、会社全体で見ると大きな仕事を立て続けに入っていて、人手が足りないのです。マクロの見方を持つ必要があるという話をしました。自分でも、マクロでものを見る訓練をしなければならぬと思いました。

又、営業所の人に、「お客様に会いたいと思わせるような何かノウハウを持っていますか」と聞いています。相手先を訪ねて行ったら「よく来たね。あなたなら是非時間を空けて話を聞きたいと思う」と言われるような魅力のある人間になっているか。私は「この人」と思ったら、年に4回年賀状を出す努力をしています。そうすると相手にも「会いたい」と思って戴ける。

今回あちこち拠点回りをして、自問自答してみるチャンスになったと感じます。それも「命懸けで・死に物狂いで」と思っていると、入って来る情報が違います。気楽にふらっと行くと、残る情報が少ししかない。真剣に死に物狂いでやっていると、ずしっとした良いところが残ります。

時間でございますので、本日の講話を終了致します。どうぞ中斎塾東京フォーラムを多角的にご活用下さい。有難うございました。